

## 老川慶喜教授記念号に寄せて

老川慶喜先生は立教大学経済学部において、長年にわたり教育・研究の向上と発展に尽力され、さらに立教大学の発展と充実にも大きく寄与されました。その老川慶喜先生の功績を讃えて、本記念号を発刊できることは、経済学部にとって大変に名誉なことです。

老川慶喜先生は、1968年に立教大学経済学部へ入学され、近藤晃先生のゼミナールにおいて大塚史学を軸として西洋経済史を学ばれました。卒業後、大学院経済学研究科に進まれた先生は、逆井孝仁先生の下で国内市場形成の観点を重視した鉄道史研究に着手されます。先生がこれまで積み重ねられてきた膨大な研究業績の中核をなす老川鉄道史研究がここから始まります。先生は1974年に博士課程に進学しますが、これと同時に川口市立川口高等学校の教諭となられます。博士課程の6年間を、先生は高校教諭と大学院生の二足の草鞋を履いて過ごされました。そうした多忙な生活の中でも先生は着々と研究を進められ、1982年には博士学位を授与されます。1983年に先生は川口高校を退職され、関東学園大学経済学部の専任講師となります。同助教授を経て、1988年に帝京大学経済学部助教授、1991年からは本学経済学部経営学科助教授に就任されました。これ以降、2015年3月に定年退職されるまでの24年間、先生は母校である立教大学ならびに経済学部の発展のために力を尽くされ、学問の府としての本学および経済学部の名声を大いに高められました。

老川慶喜先生は経済学部では主に日本経済史を担当され、優れた学問研究が投影される教育を通じて、多くの有為な人材を社会に送り出してきました。また、大学院教育でも肌理細やかな研究指導を通じて、多くの研究者を育成されました。先生の学問的名声とフランクな人柄も相俟って、先生の下には本学の大学院生のみならず、様々な大学の大学院生や若手研究者が指導を求めて数多く集まり、まさに老川梁山泊といった存在でした。ここで先生の薫陶を受けた大学院生や若手研究者が数多く全国各地の大学で教鞭を取っています。ここからも分かるように先生は優れた研究者であると共に優れた教育者でもあり、研究者養成大学院としての本学の名声を高め、大きな足跡を残されました。

老川先生の研究業績は、多彩かつ膨大なものですが、その中核は大学院時代から積み重ねられた鉄道史研究です。最初の公刊論文「両毛地方における鉄道建設 「北関東市場圏」 形成の問題として」(1974年)からスタートされ、最初に上梓された『明治期地方鉄道史研究』(1983年)は、研究視角の斬新さから当時の学界に大きな衝撃を与えました。その後も『産業

革命期の地域交通と輸送』(1992年),『近代日本の鉄道構想』(2008年),『埼玉鉄道物語 鉄道・地域・経済』(2011年),『井上勝 職掌は唯クロカネの道作に候』(2013年),『日本鉄道史 幕末・明治篇』(2014年),『日本鉄道史 大正・昭和戦前篇』(2016年)などの著書を次々と公刊し,常に鉄道史研究の最前線で活躍をされ続けています。これら一連の研究は学界で高く評価され,交通図書賞,企業家研究フォーラム賞など名誉ある賞を次々と授賞されました。それまで運輸・交通の側面から研究されてきた鉄道業を,商品流通や市場形成の観点から見直した老川鉄道史は,それまでの研究史を根本から書き換えるもので,現在の鉄道史研究の潮流を創出する役割を果たされました。こうした新たな研究視角の提示と同時に先生は新たな鉄道史料の発見・復刻でも大きな成果を上げられました。戦前期の『鉄道史資料』や『近代日本物流史資料』など,先生が全国各地をめぐって蒐集された貴重な資料群は,現在,学界の共有財産となっています。

こうした独創的な鉄道史研究に軸を置きながらも,先生はそこに止まることなく,様々な分野で優れた研究成果を上げられます。例えば,総合商社史,商工会議所史,自動車産業史などに関する一連の研究があり,研究対象もアメリカ,満洲,台湾など海外にも広がっています。特に,東京オリンピックを切り口として高度経済成長期の日本社会と経済の変貌を浮き彫りにした『東京オリンピックの社会経済史』(2009年)は,社会的に大きな注目を集める研究成果でした。こうした多彩な分野における諸研究においても,一次史料を丁寧に読み解き,史料に基づき歴史像を構築される,先生の実証的研究方法が貫かれています。

さらに先生は学会での活躍を通じて,研究基盤の拡充と発展にも大いに貢献されました。社会経済史学会では,評議員,幹事,理事,常任理事を長く歴任し,学会の中心メンバーとして社会経済史学の発展に大きく寄与されました。また,鉄道史学会においては,学会創設に奔走され,その後も理事,学会長として,鉄道史研究の隆盛と後進の育成に力を尽くされました。これら以外にも交通史学会,経営史学会など多数の学会で重責を担ってこられました。

また,老川先生は自治体史の編纂や社史・伝記の執筆などを通じて,アカデミズムの枠を超えて,自らの研究成果を広く社会に還元することにも意を尽くされました。自治体史に関しては,埼玉県史,川口市,浦和市,大宮市,春日部市,志木市,久喜市,蕨市,伊奈町,習志野市(千葉県),今市市(栃木県)など,埼玉県内を中心に多くの自治体史の編纂で中心的役割を果たされ,その成果は講演や公開講座などを通じて広く社会に発信されました。また,自治体史編纂と同様の社会貢献として,先生は多数の会社史や伝記も執筆されています。特に,日本煉瓦製造,大塚製靴,阪神電鉄,西日本鉄道,京阪電鉄,三井不動産などの会社史では,社内資料を用いてその歴史的意義を丹念に掘り起こし,その多くが優秀会社史賞という権威ある賞を受賞されています。

老川慶喜先生は社会活動でも大きな足跡を残されています。学識経験者として,埼玉県やさいたま市,横浜市の各種委員,日本学術会議連携委員・特別連携委員,国立歴史民俗博物館委

員など、多くの公職を務められました。特に、先生が中心となって進められた、さいたま市(旧大宮市)への鉄道博物館誘致では、その顕著な貢献が認められ、さいたま市文化賞(2007年)を受賞されています。この鉄道博物館が開館以来、根強い人気スポットになったことはご承知の通りです。このように老川先生は、学術研究活動のみならず、こうした社会活動を通じて、本学および経済学部の名誉と権威を大きく高められました。

次に、老川慶喜先生の立教大学への貢献について記したいと思います。先生は1991年に経済学部助教授として着任され、1993年に教授に昇格されました。その後、1998年に経済学部から大橋英五第16代総長が誕生すると、先生は総長補佐に就任して大学院改革を担われ、社会人大学院の設立に力を尽くされました。さらに同年11月には新設された立教学院史資料センター長も兼任されます。研究休暇による中断を挟みますが、先生は退職される2015年3月まで同センター長として一貫して立教学院史研究の基盤構築に貢献し続けました。また、2001年には経済学部長兼経済学研究科委員長に選出され、経済学部運営の責任者となります。老川学部長時代は、会計ファイナンス学科や大学院国際企業環境コース(現在の社会人コース)の新設、研究室の12号館移転など、経済学部改革が大きく進展した時期であり、先生はそうした改革の舵取り役でもありました。その後も2005年には大学院の前期課程および後期課程の主任を兼務し、2013年から退職される2015年3月まで経済研究所長も務められました。このように先生は経済学部および立教大学の発展に尽力され、計り知れない貢献をされました。

老川慶喜先生の功績を学術研究、社会貢献、大学および経済学部運営を中心に振り返りました。あらためて各方面におけるその功績の偉大さに瞠目させられます。特に、先生が立教大学経済学部教授として行ってきた学術研究や社会貢献は、学会や社会における立教大学および経済学部の評価を大いに高めました。老川先生が身を以て示された研究・教育に対する真摯な姿勢と旺盛かつ秀逸な学術的営為は圧倒的な迫力で私たちの胸に迫ります。先生の学問研究にかける思いと情熱は、大学人として私たちが深く胸に刻み継承していかなければならないものと思います。

最後に、やや個人的な心情の吐露をお許しいただければ、老川先生から30年以上にわたり身近にご指導をいただき、時に厳しい叱咤を、時に真摯な激励を受けてきた身を顧みると、自ら慙愧の念に堪えない思いです。しかし、立教大学退職後も先生は、跡見学園女子大学副学長・観光コミュニティ学部教授として研究・教育の第一線に立ち続けておられます。先生のご期待に僅かでもお応えするための猶予を与えて戴いたように感じます。

老川慶喜先生がこれからもご健勝であると共に新たな環境で益々活躍されることを祈念して、本記念号の発刊の辞に代えさせていただきます。

2016年2月

経済学部長 須永 徳武